幼稚園の砂場における幼児のイメージの表出に関する調査研究

大野紘子・今村光章

A survey of expressions of infant's images at a sandpit in a kindergarten

Hiroko Ono　Mitsuyuki Imamura

Ⅰ. 問題と目的

本論文の目的は、砂場で幼児（3－6歳児）が造形物を作る際、どのようなイメージ（想い描いたもの）を表出するのか、何がそれに影響するのか。また表出されたイメージをどのように他児や保育者と共有するのかについて検討することである。

換言すれば、幼児が砂場で砂をどのようなものに見立てるのか、また、その見立てに影響を与える要因は何か、そして、その見立てをどのように他児が受け止めるのかを明らかにすることである。

本研究に着手する背景には、自らがイメージするもの（想起するもの）を言葉や造形物で表出したり、そのようにして表出された他者のイメージを、言葉や表情で受け取ったりする機会が減少しているのではないかという疑問がある。それというのも、近年、電子機器の発達と普及によって、私たちは写真やメールなど多くの表現媒体を手に入れたからである。インターネットやＳＮＳ上などで、不特定多数の相手と日々の出来事に関する画像や映像といった生々しいイメージを頻繁に文字通り共有することができる。

一面的には、他者と同じイメージを共有することが容易になったと言える。だが反面、上記のような媒体を使わずにイメージを共有することが難しくなったのではないだろうか。また、イメージ伝達の利便性は、人間形成にとって良い影響をもたらしているのだろうか。

人間形成の過程においては、人と人とが直接に対面し自分の頭の中に描いているイメージを言葉で説明し、他者と共有する過程が必要である。しかし、イメージ伝達の利便性を優先させるあまり、表出されたイメージを共有する力が育成されにくくなったのではないだろうか。

以上のような理由から、本論文ではイメージを共有する力の育成に大きな影響を与える幼児期の遊びに注目したい。とりわけ、幼児期の遊びの中でも、砂場はイメージを表出し、それを他者と共有する場として優れている。そのため、以下では、砂場における幼児のイメージの表出とその共有に焦点を当てて考察したい。

では、本論文で取り上げる砂場とはどのようなものだろうか。まずは砂場の特徴を確認しておこう。砂場の特徴は主に２点ある。

第一の特徴は、砂場が自己表現の場になり得るという点である。砂は、可塑性の高い素材であるため、自分の思いや考えを表現することができる。言葉で自分の気持ちを表現することがまだ難しい幼児にとって、一番身近な自己表現の場となりえる。

第二の特徴は、共同遊びの場になり得るという点である。砂場は開放的な空間であるため、他児と関わる機会が生まれやすい。実際に砂場では、幼児は他児と頻繁に遊んでいる。

以上のように、砂場は内なるものを表出する場

と、他者と関わる場の２側面を有している。

では次に、先行研究を手掛かりに砂場の歴史を簡単に確認しておこう。周知の通り、1898（明治31）年には「砂場」の文言が「幼稚園庭園設計方」に掲載されている。その後、徐々に砂場の普及は進み、1926（大正15）年には「幼稚園令施行規則」において砂場の設置が定められていた。この頃には、砂場への認識は定着し始めており、砂場設置の規定は戦後の「保育要領」や「幼稚園設置基準」へと受け継がれている。以上のように、砂場は長い歴史を持つため、これまでさまざまな視点で研究がなされてきた。

そこで、砂場に関する先行研究を一瞥しておこう。たとえば、朴恩美・中坪史典らは「幼児の砂遊びに関する日本の研究動向と今後の展望」において、砂遊びの教育的意義に関する研究動向を対象とし、その成果をレビューしている。その結果、砂遊びに関する日本の研究は、その多くが幼児にとっての砂遊びの意味についてであるということが指摘されている。また、小谷宜路は「幼児教育における「砂場」の教育的意義に関する研究」において、５つの教育的意義を見出している。その５つとは、（1）科学性の芽生え、（2）イメージと造形、（3）安定感・解放感・充実感、（4）人間関係、（5）言葉である。「イメージと造形」を砂場の教育的意義として位置づけ、著作権や主導権の流動性が、他の遊びには存在し得ない砂場の特性であることを示した点は、小谷の独自性であると言える。

他にも珠玉の研究があるが、簡潔に言えば、砂遊びに関する日本の研究は、その多くが砂場の教育的意義や役割についてであった。箕輪潤子の「幼児の砂遊びにおける遊びとイメージの共有」のように、本論文と同様にイメージに焦点を当てている論文はある。しかしながら、イメージと造形に着目した研究はわずかである。

以上のような背景から、本論文では、①幼児は頭の中のイメージを砂でどのように表現しているのか、②表現したものをどのように他者と共有しているかについて調査し研究する。

具体的に言えば、造形物の観察と幼児の行動観察の２つを行う。幼児が作った造形物を観察することで、幼児がどのようなイメージを砂で表出しているのかについて検討する。また、砂場での幼児の行動を観察することで、どのように他児とイメージを共有しているのかについて検討をする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象と期間

Ａ市にある私立幼稚園（園児数約200名）で調査を行った。対象園には、砂場大と砂場小の２か所の砂場があり、どちらも調査対象とした。砂場小は多量な水を入れてダイナミックに遊ぶことが許されている泥質の砂場であり、砂場大は一般的な砂場である。砂場小は、約4m×2mの大きさであり、砂場大は、約5m×5mの大きさである。

図１　対象園の砂場（大）

図２　対象園の砂場（小）

対象児は、２か所の砂場で遊ぶ３歳児、４歳児、５歳児の全園児とした。なお、この調査に先立ち８

日間の予備調査を行った。

期間は2016年10月から11月のうちの12日間（10/18、19、21、24、26、27、11/2、4、7、11、14、16）であり、時間帯は8：30〜10：00までの自由遊び時間とした。

2. 調査方法

砂場で造形物を作っている幼児が造形物を作り終えたタイミングで、第一著者である大野が「これ、なぁに？」と発話し、造形物を何に見立てているのかについて問いかけた。フィールドワークにノートを持参し、幼児の回答を記録した。

また、同時に造形物をカメラで撮影し、写真による記録も残した。調査終了後には、記録したノートと写真をもとに、幼児の言動をエピソード記述によってまとめた。

Ⅲ－1　結果と考察

「これ、なぁに？」発話を実施した結果、幼児から128の回答を得ることができた。Ⅲ－1では、得られた回答を4つの視点から分析する。

その視点は、1. 対象とした幼児について、2. 造形物の種類、3. 造形物の特徴、4. 使用した道具の特徴である。

1. 対象とした幼児について

調査の対象とした幼児は延べ193人であった。そのうち、男児が106人（55%）、女児が87人（45%）であった。対象幼児の年齢は、3歳児が93人（48%）、4歳児が18人（9%）、5歳児が82人（43%）であった。3歳児が最も多いという結果から、1人遊びをすることの多い3歳児にとって、砂場は魅力的な場であると言える。

3歳児が93人、5歳児が82人であるのに対し、4歳児は18人と極端に少なかった。その理由として、幼稚園の行事や幼児の砂場への関心度などの影響が考えられるが、原因の特定はできない。したがって、この結果から、砂場で遊ぶ幼児の人数に年齢による差異があるということは一概には言えない。

年齢における発達段階は、砂場における遊びの規模にもその特徴が見られる。造形物を1人で作った幼児と、複数人で作った幼児の人数を年齢ごとに集計した結果、造形物を1人で作ったのは3歳児が最も多く、60人（3歳児全体の65%）であるのに対し、5歳児は19人（5歳児全体の23%）であった。一方、複数人で作った幼児は5歳児が最も多く、62人（5歳児全体の77%）であるのに対し、3歳児は33人（3歳児全体の35%）であった。当然のことながら、この結果から、砂場において3歳児は他児と遊ぶことよりも1人で遊ぶことの方が多く、5歳児では他児と関わりながら遊ぶ機会が増えているということが言える。

2. 造形物の種類

次に、幼児が砂でどのような造形物を作ったのかについて検討してみよう。ここでは、「食べ物」、「土木」、「その他」の3つのカテゴリーを設け、全128個の造形物を分類した。なお、「食べ物」はデザートやご飯もの、飲み物の3つの見立てを、「土木」は、川や山、道、穴の4つの見立てを表したものである。

分類の結果、「食べ物」に見立てられた造形物が約60%、「土木」が約19%、「その他」が約18%であった。

さらに、「食べ物」を「デザート」、「ご飯もの」、「飲み物」、「その他」の4つに分類した。なお、「ご飯もの」とは、米や麺などの炭水化物の見立てを意味する。分類の結果、「デザート」が56%、次いで「ご飯もの」が26%となった。さらに、最も高い割合を占めた「デザート」を「ケーキ」、「かき氷」、「プリン」、「くだもの」、「その他」の4つに分類した。

その結果、「ケーキ」が51%と半数を占めた。「ケーキ」の実例の中にはさまざまなケーキの見立てが存在していた。なかでも、バースデイケーキとパンケーキの見立てが多かった。木の枝をロウソクに見立ててバースデイケーキを作り、友達と一緒に歌を歌って誕生日会の真似をする場面は4回ほど観察することができた。家庭や幼稚園において、誕生日会で祝ってもらったという経験がバー

スデイケーキの見立てに反映されているのだと推察できる。

このように幼児の経験が造形物に反映していると言えるだろう。造形物そのもので完結するのではなく、造形物が他児とのコミュニケーションの媒体としても働くということが言えるだろう。

また、パンケーキの見立てが多くあったという事実からは、流行りの言葉の影響があることが推察できる。昨今、日本でパンケーキが広く普及したことにより、テレビや日常の会話から「パンケーキ」という言葉を耳にする機会が多くなった。幼児は、大人の言葉をしっかりと聞いて覚えており、それを遊びにも反映させている可能性がある。

「ケーキ」に次いで多くあった見立ては「かき氷」である。調査時期は10月であったものの、砂場が日の当たる場所に位置していたため、暑く感じられるほどであった。そのため、秋にもかかわらず「かき氷」の見立てが見られた。

「かき氷」の見立てが最後に登場したのは10月24日であり、それ以降かき氷の見立ては見られなくなった。他方、11月2日には「ちゃんぽん鍋」という見立てを観察することができた。これは、11月に入り気温が低くなったことにより、温かい食べ物を連想しやすくなった影響があると考えられる。幼児も季節を感じ取り、造形物にそれを表出しているのである。

以上のことから、用意される道具や気温などの自然条件といった外的要因と、日常生活における経験といった内的要因が、幼児のイメージに大きな影響を与えていると言える。

最後に、「土木」を「山」、「穴」、「その他」の3つに分類した。すると、山の見立てが約半数を占め、最も多い結果となった。事例の中には、山を作った後に、そのままトンネル作りへと発展するものもあった。つまり、山の見立てからトンネルの見立てへと移行したことは流動的なストーリーの一部にすぎず、幼児の頭の中では、必ずしも「山を作った」、「トンネルを作った」という単体の見立てとして捉えている訳ではない。幼児同士または幼児と保育者同士の言葉や動きによるやりとりの中で、イメージの世界はストーリー化され、進展するためである。つまり、砂場は幼児のイメージを流動的に変化させる可能性を秘めた場であると言える。

図3　パンケーキ

図4　バースデイケーキ

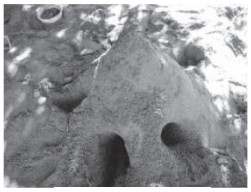

図5　トンネル

図6　落とし穴

3. 造形物の特徴

ところで、幼児は、実在するものだけでなく、実在しないものを砂で造形する場合もある。ここでは、想像上の造形物を取り上げよう。

実在するものに見立てている造形物と、実在しないものに見立てている造形物の数をそれぞれ集計し、割合を示した。その結果、実在するものに見立てた造形物は112個で、実在しないものに見立てた造形物は16個であった。実在しないものに見立てた造形物の例としては,「恐竜の足跡」や「神様のケーキ」,「天国のカレー」といった想像性豊かな見立てがあった。

さらに、実在しないものに見立てた幼児は何歳児が多いのかということを明らかにするため、年齢比較を行った。それぞれの年齢における全体の人数と、実在しないものを作った幼児の人数の割合を算出したところ、3歳児が全体の9.7%、4歳児は5.6%、5歳児は28.4%であった。

この結果より、最年長である5歳児は、実在しない、架空のものに見立てる頻度が高いということが言える。一方、4歳児の割合については、データが極端に少ないため、信憑性に欠ける。した

がって、この結果から、年齢が上がるにつれて架空のものを想像する力が高まるとまでは断定できない。しかしながら、5歳児における割合が3歳児における割合の3倍という点から考えれば、発達段階によって抽象的なイメージを持ち、それを表現することが可能になるということは明らかであるだろう。

4. 使用した道具の特徴

幼児が作った造形物の中で、「食べ物」が 60%という高い割合を占めた要因として、使用した道具が関係していると推測した。そこで、調査を行った対象園における道具の種類と個数について調査した。

その結果、対象園において、砂場で使用することのできる道具は 228 個用意されており、2 つの種類があった。その 2 種類とは、スコップや型などの砂場用のおもちゃと、各家庭から集めたフライパンなどのキッチン用品である。砂場用おもちゃの個数は 133 個と全体の 58%であり、キッチン用品の個数は 95 個と全体の 42%を占めている。さらに、133 個の砂場用おもちゃの中には、ふるいやろうと、すり鉢、皿、型といった調理場面を連想させるような道具が 74 個含まれており、砂場用おもちゃ全体の 55%である。これにキッチン用品を合わせると 169 個となり、全 228 個の道具のうち、約 74%が調理場面を連想させるような種類のものであると言える。

このように、調理場面を連想させる道具の数と種類が豊富であるため、幼児はままごとの真似をする場面が多くなり、食べ物の見立てが最も多いという結果になったのだと考察する。

以上のことから、幼児が砂で何を作るかという意思は、砂場で使用される道具に左右されると言える。ただし、調査園を 1 か所に限定したため、他園でも調査を行うことが今後の課題である。

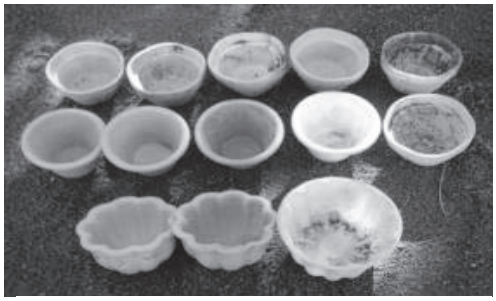

図 5 砂場用おもちゃ - 型

図 6 キッチン用品 - ボウル

図 7 砂場用おもちゃ - スコップ

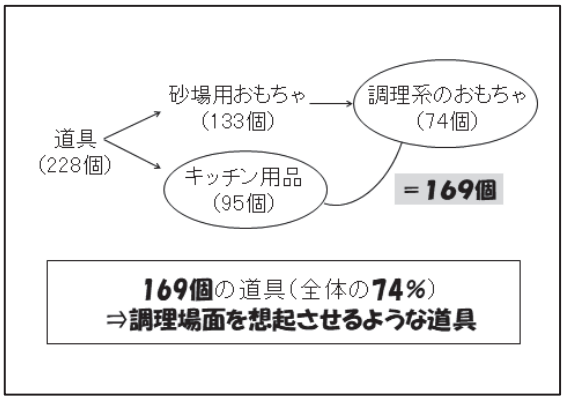

図 8 調理場面を想起させる道具の割合

表１　道具の内訳

砂場用おもちゃ					
調理場面を想起させないもの		調理場面を想起させるもの			
スコップ	33	型	37		
くるま	22	ふるい	14		
トンネル	4	ろうと	10		
		丸皿	9		
		すり鉢	4		
小計	59	小計	74		
合計	133				
キッチン用品					
ボウル	12	弁当箱	5	やかん	2
ざる	12	お玉	5	コップ	2
容器	9	しゃもじ	4	やかん	2
皿	9	鍋	3	網	1
フライパン	9	製氷機	3	スプーン	1
型	8	フライ返し	2	ドリッパー	1
泡だて器	7	コップ	2		
合計	95				

Ⅲ－2　エピソード記録と考察

本項では、幼児の発話や幼児同士の会話、幼児と保育者のやりとりなど、砂場において遊んでいる幼児の言動をエピソード記述として記録したものを以下に掲載する。また、砂場において、幼児は他者とどのようにイメージを共有しているのかという視点で考察を行う。なお、幼児の名前はすべて仮名である。

(1) 幼児－幼児

エピソード１

砂場Ｂで遊んでいた５歳児の集団が、「宝が見つからない」「宝があった」という具合に、「宝」という言葉を口ぐちに使っていた。そこで私（第一著者）が、「宝って何？」と尋ねてみると、「こうゆう固いのだよ」と言って土のかたまりを見せてくれた。砂場Ｃで遊んでいた別の５歳児も、「宝」という言葉を使っていた。どうやら５歳児の間で「宝探し」が流行しているようだった。

考察

エピソードでは、「宝」という言葉を使用することによって、仲間同士で土のかたまりに対するイメージの共有化がなされている。「宝」という言葉が、５歳児の集団において比喩的な意味を持ち、幼児同士に共通認識を持たせる言葉として役割を果たしている。

(2) 幼児－保育者

エピソード２

私（第一著者）が砂場へ行くと、砂場Ａの横にある家に招かれた。子どもたちに、「どうぞどうぞ」と言って中に入るように誘われた。私が「お邪魔しまーす」と言って家の中に入ると、子どもたちは嬉しそうにしていた。

私が家の中の椅子に座っていると、4，５人の３歳児が次々と砂を入れた皿やコップを嬉しそうに運んできた。私に「はい、どうぞ」と言って砂の入った皿やコップを渡してくれた。私が、「ありがとう。これはなんだろう？」と言って尋ねてみると、子どもたちから「ご飯」や「お茶」、「ケーキ」という答えが返ってきた。私が「いただきまーす」と言って食べる真似をし、「ごちそうさまでした」と言って容器を返すと、子どもたちは嬉しそうに容器を回収して砂を捨てた。

子どもたちは、容器ごと私に手渡す場合や、容器で砂を持ってきて、砂だけを私の手の上に置く場合があった。手の上に砂を置く場合には、私が「いただきます」と言って食べ始めると、子どもはじっと私の様子を見て食べ終わるのを待っていた。そして、私が「ごちそうさまでした」と言って食べ終わると、子どもたちは満足そうな顔で微笑んだ。

考察

本エピソードにおいて、子どもたちは、家に私

を招き入れた時から、自然と言葉が敬語になっていた。このことから、家にいた4、5人の幼児の間で、「自分たちはお客さんを招く家主である」というイメージが共有されていたのだと考えられる。

また、遊びに乗ってくれる大人に対し、子どもは満足感を得ている様子も伺えた。本事例で言えば、私がお客さんになりきり、出された食べ物を食べる真似をすることで、「家主である」という子どもたちのイメージを守り、それを認めていることにつながっているのだと推察する。

(3) 幼児－保育者－幼児

エピソード3

かれんちゃんとひろこちゃんが向かい合うように座り、かれんちゃんは砂山を、ひろこちゃんは型抜きでドーナツを作っていた。私がかれんちゃんに「何を作ってるの？」と尋ねると、かれんちゃんは「山だよ」と答えた。

私とかれんちゃんの会話を聞いていたひろこちゃんが、私に向かって「ひろこ、山に登ったことあるよ」と話しかけてきた。ひろこちゃんに対して、私が「ひろこちゃんは山に登ったことがあるんだ、すごいね！」と、かれんちゃんに聞こえるように話した。

私とひろこちゃんのやり取りを聞いて、かれんちゃんが、自分で作った砂山を指しながら「じゃあ、これはひろこちゃんの山」と言った。私は、「ひろこちゃんの山」という表現に感動し、「ひろこちゃんの山なんだ！いいね！」と言ってかれんちゃんを褒めた。

次に、私がひろこちゃんに「この山、ひろこちゃんの山なんだって」と伝えると、ひろこちゃんは何も言わずに少し微笑んだ。

考察

かれんちゃんは初め、単なる「山」を作っていた。しかし途中で、「ひろこちゃんは山に登ったことがある」という情報を聞いたことによって、かれんちゃんは「単なる山」から「ひろこちゃんの山」へと変化させた。

本事例では、かれんちゃんのひろこちゃんと一緒に遊びたい思いが現れていることが看取できる。かれんちゃんとひろこちゃんは向かい合わせの位置にいるものの、一緒に遊んでいる訳ではない。

しかし、かれんちゃんが砂山を「ひろこちゃんの山」と表現したことから、一緒の遊びはしていないものの、ひろこちゃんの言動を気にかけていることが分かる。そして、かれんちゃんの「ひろこちゃんの山」というイメージがひろこちゃんに伝わった時は同時に、それぞれ別々で遊んでいたひろこちゃんとかれんちゃんの世界が共有された瞬間でもあると推察する。

エピソード4

午前の活動において、穴を掘り、水を入れて遊んでいた4歳児が、穴の様子を見るために砂場Aにやって来た。午前中にたくさん入れたはずの水がなくなっていることに気が付くと、子どもたちは「水がない！」と言いながら興味津々に穴を見ていた。

そこで、私が子どもたちに「あれ、水どこいったんだろうねー？」と問いかけると、ももかちゃんが「わかった！この下に埋まってるんだ！」と目を輝かせながら答えた。その場にいた他の3人の子どもも、「そうやそうや！きっと埋まっとるんや」と言ってももかちゃんの意見に賛成した。私が、「あ、そうか！埋まっとるかもしれんね！よーし、掘ってみるぞー！」と言って素手で掘り始めると、4人の子どもたちも素手やスコップを用いて夢中に穴を掘り始めた。

2，3分が経ち、互いに「あれ、水が出てこないね」、「まだかなー？」と言いながら掘っていると、それまでその場にいなかったゆなちゃんがやって来た。ゆなちゃんは、みんなが水を探して穴を掘っている様子を見て、「砂が水を食べちゃったんじゃない？」と言った。それを聞いた、まりちゃんとまさきくんは、「そうや！きっと石とか砂が水を飲んだんや！」と、ゆなちゃんの意見に賛成した。

しかし、ももかちゃんとひろゆきくんはまだ、水は穴の下に埋まっていることを主張していた。そこで私が「えー、どっちなんだろうね？」と言

うと、ももかちゃんは「まだ出てくるかもしれん！」と言って穴を掘りだした。

ひろゆきくんも「そうや！」といって穴を掘りだしたので、私も「じゃあ、もう少し掘ってみようか！」と言って一緒に穴を掘り進めた。

3分ほど経過したところで、私が「なかなか出てこんねー、やっぱり砂が食べちゃったんかな？」と問いかけると、ももかちゃんは「そうや！砂が食べたんや」と言って納得したように言った。続いてひろゆきくんも、「うん、そうだね。きっと食べたんや」と言ってももかちゃんの意見に賛同した。

考察

まず、本事例において注目したいのは、子どもの想像力と表現力である。水が土の中に埋まっていることを想像したり、水が砂に浸透することを「砂が水を食べた」と表現したりするのは、純粋に物事を見つめる子どもならではの視点である。大人になって常識を身に着けたとしても、想像や表現を楽しむ心は日常を豊かにしてくれるのではないだろうか。したがって、「砂が水を食べることなんてあり得ない」という常識を教えることよりも、大人が子どもの発想を認めることによって、想像や表現を楽しむ心を育むことの方が重要であると考える。

また、3歳児と4歳児を比較してみると、子どもたちに「どうして」、「どこへ」、「どうやって」などの質問をした際に返ってくる返答が異なる。3歳児は、問いかけても黙って答えないか、または「わかんない」などの返答が多い。一方で4歳児では、本事例のように、自分なりに考えて返答をする子どもが増えていることが観察できる。したがって、3歳児よりも4歳児の方が思考力や想像力が活発になると言えるのではないかと推察する。

Ⅳ. まとめ

本論文では、幼児の作る造形物が何に見立てられているのかについて、事例を収集し分析を行った。その結果、幼児が見立てを行う上で影響を受ける要因が明らかとなった。その要因として、以下の4点が挙げられる。

まず、造形物の見立ては道具と関係性が深いことが明らかになった。

全128個の造形物を「食べ物」、「土木」、「その他」の3つに分類した結果、「食べ物」に見立てられた造形物が約63%と、最も多い割合を占めていることが分かった。

他方、調査対象の幼稚園で砂遊び用として用意されている道具の数を集計したところ、228個であった。そのうち、全体の約74%を占める169個の道具は、キッチン用品や皿、ふるいなどといった調理場面を連想させるような種類のものであった。このように、調理場面を連想させる道具の数や種類が豊富であるため、幼児はままごとをして遊ぶ環境が整えられ、食べ物の見立てが最も多いという結果につながったのだと考えられる。

以上のことから、幼児の砂場における造形物の見立ては、使用される道具の影響を受けていると言える。

次に、幼児の中にある「経験」が造形物に影響を与えていることも判明した。ここで言う「経験」とは、身近な大人の会話や本やテレビで見た物事、仲間同士の会話や遊びなど、幼児が日常生活において体験する事柄のことを指す。

たとえば、家で誕生日会が行われた場合、幼児は楽しい記憶を再現しようと、砂で誕生日ケーキを作り、友達と歌を歌ったりする。モグラの生態についてテレビで見て興味を持つと、砂場を掘り起こしてモグラを探そうとする。家でお父さんがコーヒーを入れている姿を見ていれば、幼児は砂と道具を使って同じようにドリップする姿を再現する。

まだ幼い幼児にとっては、日常生活で体験する全てのことが新鮮な刺激であり、好奇心の対象となる。それらの「経験」は幼児の頭に記憶され、砂で表現する際の材料となる。

さらに、気温や天候、季節感といった自然の条件も幼児の造形物に影響を与えていた。

「かき氷」の見立てを例に挙げるとする。10月

18 日から 10 月 24 日までの 3 回の調査のうち、「かき氷」という見立ては 6 回記録された。しかし、10 月 24 日以降、11 月 16 日までの 8 回の調査のうち、「かき氷」の見立てが記録されることは一度もなかった。

一方で、11 月に入ると「ちゃんぽん鍋」や「ラーメン」など、温かい食べ物の見立てが記録されるようになった。このことから、気温が高い夏の時期には冷たいものを見立て、気温が低い冬の時期には温かいものを見立てる傾向があると言える。したがって、幼児が見立てを行う際には気温や天候、季節感によっても影響を受けているのである。

最後に、想像力も影響を与えていた。これは、実在しないものに見立てられた造形物と、茶色のものに見立てられた造形物の 2 点に焦点を当てた結果、明らかとなった。造形物を実在しないものに見立てた事例に注目し、3 歳児と 5 歳児を対象に年齢比較を行った。なお、実在しないものとは「恐竜の足跡」や「天国のカレー」のように、実際には存在しない架空のものを指す。年齢を比較した結果、5 歳児は 3 歳児よりも、実在しないものに見立てた人数が多かった。

また、造形物を茶色の物に見立てた事例においても、3 歳児と 5 歳児を対象に年齢比較を行った。なお、茶色の物の見立てとは「カレーライス」や「チョコレート」のように、砂の色から連想させやすい茶色の物に見立てて作られた造形物のことを指す。年齢を比較した結果、3 歳児は 5 歳児よりも、茶色の物に見立てた人数が多かった。

上記 2 つの結果から共通して言えることは、実在しない架空のものを考える想像力や、目の前にある砂を頭の中で別の色の物に変換する想像力は、発達段階を経る中で獲得されるものであるということだ。そうした想像力の発達によって、幼児が作る見立ては変化すると言える。

これまで見てきたように、道具、経験、天候、想像力によって、幼児がつくる造形物が変容することが明らかになった。以上のことを踏まえるならば、保育者は、慎重に砂場の道具の選択と設置の工夫をしなければならないといえるだろう。

まず、保育者は砂場の道具の偏りに注意を払う必要がある。道具の種類と数で、幼児の見立てが縛られてしまい、幼児の自由なイメージの発想に制約をかけてしまう可能性があるからである。逆に言えば、保育者のねらいに沿って、それにふさわしい道具を用意することが重要である。

本論文では採りあげなかったが、砂に触れることに抵抗がある幼児にとっては、道具を使うことによってその抵抗感が薄れ、砂で遊ぶ契機になるということもある。砂場への導入が道具によって可能になることがある。したがって、砂場道具は砂場への「道案内」であると言えるだろう。

だが反面、道具を使用することによって、幼児が自らの手で砂に触れるという機会が減少してしまうことが懸念される。手で砂を触ってほしいときには、道具は邪魔になるだろう。砂場遊びの導入部分でどのような道具を出すかは非常に重要な課題である。

また、砂場遊びを楽しみ始めた幼児に対しては、豊富で多種多様な砂場道具を出せば、幼児が表現できる造形物の幅は広がるかもしれない。しかし、道具に頼りすぎるということもある。単に多くの道具を設置すればよいわけではない。

このように、保育者は、砂場での道具の用意一つにも力量が試されているということを意識し、ねらいを持って取り組む必要がある。

【謝辞】

たいへんお忙しい中、本調査にご協力いただき、丁寧にご助言をいただきました、私立かぐや第二幼稚園の園長先生はじめ先生方に心より感謝申し上げます。

註

氏原寛，1992 年，『心理臨床大事典』，培風館，375 頁。

岡田正章・千羽喜代子，1997 年，『現代保育用語辞典』，株式会社フレーベル館，248 頁。

小田豊・山崎晃，2013年，『幼児学用語集』，北大路書房，165頁。
柏女霊峰・森上史朗，2013年，『保育用語辞典　第7版』，ミネルヴァ書房，71頁。
粕谷亘正，　2007年，「砂にかかわる幼児の遊びの構造とその理解」，保育学研究，第45巻 第1号，34－41頁。
香曽我部琢，2010年，「遊びにおける幼児の“振り向き”の意味」，保育学研究，第48巻 第2号，63－73頁。
京阪神連合保育会，1973年，「京阪神連合保育会雑誌［復刻版］」第1冊 第5号，臨川書店，22-23頁。
小谷宜路，2013年，「幼児教育における「砂場」の教育的意義に関する研究」，埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要(12)，45－52頁。
新村出，2008年，『広辞林　第6版』，三省堂，1513頁。
朴恩美・中坪史典，2008 年，「幼児の砂遊びに関する日本の研究動向と今後の展望」，広島大学大学院教育学研究科紀要，第三部 第57号，285－290頁。
朴恩美・中坪史典，2009年，「韓国と日本における幼児の砂遊びに関する研究の動向」，幼年教育研究年報 第31巻，89－95頁。
松井愛奈，2001年，「幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連」，教育心理学研究，285－294頁。
箕輪潤子，2007年，「砂場における山作り遊びの発達的検討」，保育学研究，第45巻 第1号，42－53頁。
箕輪潤子，2005年，「幼児の砂場遊びにおける見立ての発生と共有の過程」，日本教育心理学会総会発表論文集（47），552頁。
箕輪潤子，2004年，「幼児の砂遊びにおける遊びとイメージの共有」，日本教育心理学会総会発表論文集（46），27頁。
文部省，　1979年，『幼稚園教育百年史』，ひかりのくに，99頁，703頁。
幼児の教育復刻刊行会議，1979 年，「復刻　幼児の教育」第13巻7号，名著刊行会，245-246頁。

参考文献

笠間浩幸，2001 年，『〈砂場〉と子ども』，東洋館出版社